

Title	田中荊三著『現代ヨーロッパ史』
Sub Title	A contemporary history of Europe
Author	中沢, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.12 (1972. 12) ,p.125- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19721215-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

田中荆三著

『現代ヨーロッパ史』

本書は、つぎのような一二の章から構成されている。

- 第一章 ロシア革命（一九一七—一九二九）
- 第二章 ドイツ革命（一九一八—一九二〇）
- 第三章 パリ講和会議（一九一九—一九二三）
- 第四章 ムッソリーニの政權獲得（一九一九—一九二九）
- 第五章 賠償問題（一九一八—一九二五）
- 第六章 世界恐慌（一九二五—一九三五）
- 第七章 ヒトラーの政權獲得と独伊枢軸（一九三一—一九三六）
- 第八章 ドイツの東方進出（一九三七—一九三九）
- 第九章 第二次世界大戦（一九三九—一九四五）
- 第一〇章 二つの世界（上）（一九四五—一九五三）
- 第十一章 二つの世界（下）（一九五四—一九六〇）
- 第十二章 一九六〇年代のヨーロッパ（一九六一—一九六七）

紹介と批評

こうした構成からもうかがい知られるように、『現代ヨーロッパ史』と題した本書は、ロシア革命を時間的な上限としたヨーロッパのその後の政治的な発展を俯瞰している。無論、このわずか半世紀の間にヨーロッパは大きく変わった。著者の指摘をかりていえば、第一次大戦前には一九の王国と五つの共和国があつたが、一九二二年には一四の共和国、一三の王国、二つの摂政国となつた（二頁）。ところが、第二次大戦を経た今日では二二の共和国と一〇の王国に変わつている。これは、共和国か王国かといったそれ自体ではさして意味のない政体上の変化ではあるが、ヨーロッパの諸国が過去五〇年の間に体験したラディカルな変化を端的に物語つている。二つの革命と二つの大戦は、ヨーロッパの中心か周辺かといったような地理的な相違をこえて各国に、もちろん世界のすみずみにまで、著しい影響を及ぼした。二つの大戦に加わつたヨーロッパの国々のなかで、一度も体制的な変革を経験しないで存続し得た国が一体いくつ数えられるであろうか。戦後のヨーロッパ諸国は過去の繰り返された苦い犠牲を反省して、それぞれ、問題の体制内的な解決に努力するとともに、EEC、NATO、あるいはコメコン、ワルシャワ条約機構といった域内協力や国際的連帯を、さらにはまた国際連合を通して、共存と繁栄を模索してきた。ヨーロッパはヨーロッパ内的な発展をたどりながらも、また同時に、ますます、ヨーロッパ外的な世界との相互依存を深め相互関係を強めてきた。したがつて本書は、無論ヨーロッパを語りながらも、アメリカ、アジア、中近東、アフリカからのヨーロッパへの発言あるいはまたこうした地域へのヨー

ロッパの介入に随所でふれている。ヨーロッパの過去五〇年の体験がいかに世界的な内実をそなえたものであつたかは改めて述べるまでもあるまい。世界の各地域を平均的に扱うことが世界史の条件でもないはずである。とすると、本書は、すぐれた「現代ヨーロッパ史」であると同時に、言葉の広い意味においては「現代世界史」でもあるといえなくもない。

もつとも、著者が「序」において指摘されているように、現代が果たして史的研究の対象たり得るか否かという問題がある。現代史の成立を否定する主要な論拠の一つは利用し得る史料の不足あるいは欠如という点である。事実、入手し得た資料にしても因果関係を測定し得る史料としては不確定なものもまた決して少なくない。特にこうしたことは社会主義国において著しい。たとえば、著者は、ロシアではじめての民主的な憲法制定会議の選挙に言及して、「結果は七〇七人の議員のうち社会革命党四一〇、ボリシェヴィキ一七五、メンシェヴィキ一六となり、政府に対する完全な不信任が表明された」(一〇頁)と記している。この数字はカー(E. H. Carr)のボリシェヴィキ革命[A History of Soviet Russia: The Bolshevik Revolution, 1917-1923, vol. 1, 1950, p. 110]に依拠されたものと思われるが、カーはマルチエフスキー(M. C. Mart'feyevskii)の『全ロシア憲法制定会議』[Всесоюзное Учредительное Собрание, С. 150, 1930]を利用した。ところが、ラドキー(O. H. Radkey)の『一九一七年のロシア憲法制定会議の選挙』[The Election to the Russian Constituent Assembly, 1950, p. 21]によると、七〇三人の議員のうち社会革命党

三八〇、ボリシェヴィキ一六八、メンシェヴィキ一八といった党派別の分類が紹介されている。では、果たしてどちらが正しいのか。どちらを史料として採用すべきであるか。しかし、いずれにしても絶対多数派が社会革命党であることは変わらないという点に注目して、著者は、広く利用されている資料を使って、「レーニンが、憲法制定会議は……労働者階級を代表してないとの理由をもつて解散を命じ……議場を閉鎖してしまつた。憲法制定会議を否定したことは、外国にては非民主的行為であるとして非難されることとなり、米国なども革命に好意的であつたのが反感に変わつていくこととなつた。国内にては、……特に九〇%が社会革命党に投じたウクライナではボリシェヴィキ政府への反対運動が盛んとなり、内乱の一因となつた」(二一頁)としている。なるほど、現代史の領域にはとりわけ現に進行中の過程を扱う場合には、大きな史料的障害が存在することは否定できないが、障害を克服することができないわけではないと、著者はいう。本書においては、史料の不足ないしは欠如を口実とした解釈の飛躍や史料のペダンティックな詮索は見当らない。一般に公表されている資料によつて現代ヨーロッパ史の叙述は充分可能であるということが立証されている。

現代史の成立を否定する主要な論拠として、さらに、観察者は主観的な被制約性から自由になり得ないという点がある。現代史の領域は他ならぬその観察者自身が現に深くかかり合つている世界であるので、ラカー(W. Laqueur)が自戒しているように、「さまざまな誘惑とあるいはまた自信過剰な独断や絶望的な懷疑と絶えず闘わな

ければならない(The Fate of the Revolution: Interpretations of Soviet History, 1967, p. 180)。したがって歴史法則の存在を頭から信じこんでいるナイーヴな歴史家や実証主義をふりかざして自らの党派性をかえりみようとしないブリミティヴな歴史家ならばいざ知らず、専門的な歴史家は、著者が「序」において嘆いているように、現代史の領域にふみこむことを躊躇してきた。だが、観察者の主観的な被制約性は免れることのできないいわば宿命のようなものであり、逆に、この宿命を自覚することによって現代史の叙述がはじめて可能となる。もつとも、そのためには、またそれなりの工夫が必要である。著者は、たとえば、イギリス、フランス、ドイツあるいはまたイタリヤといった各国の議会の議席に投影されている諸党派の消長を、それぞれのまたその時々々の政治状況との関連において丹念に整理しつつ、仮説を検討するといった工夫を試みられている。ヨーロッパの政治は革新的な中道左派の方向をたどってきたし、また今後もこうした方向をたどるであろうと。疑いもなく、事実それ自身はなにものも語らない。事実は歴史家が事実に呼びかけた時にのみ語る。「いかなる事実」に、また、いかなる順序で、いかなる文脈で発言を許すかを決めるのは歴史家」(E. H. Carr: What is History, 1961, p. 5)であり、このような決定権を著者は本書において縦横に行使している。現代ヨーロッパの発展を叙述するに当って、著者が、表現に留意されていることは無論、実に克明に事実をひろい上げていることも見逃すことができない。第二次大戦の終結をめぐる記述に際して、「フィンランドはベッアモをソヴィエトに譲」(二四

三頁)つたと指摘していることなどが、その一例である。二度にわたるソ芬戦争の結果、ソ連がヴィボルグ市をふくむカレロ地峡を獲得したことは一般にもよく知られているが、スカンジナビア半島北端のベッアモ(Pesamo)の割譲はあまり紹介されていない。しかしこの地を得ることによつてソ連は直接ノールウェイと国境を接することになった。その戦略的な重要性を考えると、著者の観察は非常に鋭く、また叙述はきわめて克明であるといわなければならない。社会科学の一研究者として、内容の豊かな『現代ヨーロッパ史』の刊行を心から感謝している。(慶応通信刊・A5判・二七〇頁、一一〇〇円)

(中沢 精次郎)

安田三郎著

『社会移動の研究』

(一)

組織における人事異動、住民登録における転入・転出などの人口異動、労働統計や労働市場などの労働「移動」等々の例にみる異動や移動の用語を除けば、本書の表題となつている「社会移動」の用